

一つの宗教原理としての「自己」の否定
― 諸宗教の統一に向かって ―

デービッド・カールソン

一 序論

先ず、「諸宗教の統一」という語句によって何を理解すべきかという質問をすることから始めたい。この論文において、私は教義の画一化という意味での統一を推進しようとしているわけではない。各信仰の間には、信条、儀式、等々に関してかなりの違いがある。しかし、似ている点もある。そうした類似点の中には非常に著しいものもあり、そうした点がある程度強調することも善にはならないであろう。そうした類似点は、十分一般的でもあるが、普遍的に適用されるものである。世界は今、驚くべき変化を経過しつつあり、宗教的な知恵のみが提供することができるような種類の助けを必要としている。ジェフリー・パリンダー(Geoffrey Parrinder)が適切に述べたように、今日の問題は、いかにして争いや戦争を避け、世界社会を世界共同体社会へ変えていくかということである。世界的な調和を建設する仕事は、宗教的信仰をもって成す以外にはとても不可能なほど、大きな任務である。なぜなら、それに必要なエネルギーとビジョンと善意は、それ以外のところからは入手できないからである。⁽¹⁾

我々は、共通の人間性の共通の大義を推進するための基盤として、いかなる種類、または水準の宗教統一をも利用するのにやぶさかであってはならない。

普遍的な適用性を持つ宗教の一面は、「自己」の否定という観念であるように私には思われる。自己の否定とは、自分自身に対するある一定の態度、および自己を否定しない場合とは質的に異なる、「他者」とのある一定の関係を意味する。自己否定は、異なった信仰の間で(表現の形態は異なっているとしても)広く共通しているので、一つの「宗教原理」として考察することは正当化される。この論文において考察しようとするのはそのことである。

本論文を書く際の根底にあるのは、韓国から出発し、文鮮明師の教えに基いた新しい哲学である統一思想^{統一思想}である。特に、本論文、統一思想の中に見られる新しい人間観に焦点をあてている。この新しい観点こそ、自己否定の正統性および正当化をより明確に理解することのできる枠組みとなりうるものであると、私は信じる。

二 様々な宗教的伝統における「自己」の伝統的な意味

宗教は一般的に人間を単なる物質的存在以上であると見る。我々人間には、我々を動物とは質的に異なるものとして何かがある。これが何かについては、異なる信仰によって異なるとらえ方がなされており、一般的には、自我、魂、霊などと呼ばれている。

ヒンズー教においては、個人の自我(アートマン)は、永遠にして不変であると言われている。「アートマンは生まれることもなく死ぬこともない。肉体が分解する時もそれは分解しない。」カータ・ウパニシャドは「アートマンは、決して生まれることもないし、決して死ぬこともない。」と述べ、さらに、「アートマンはブラーマンと共にある。これが最高の真理である。」⁽¹⁾と言っている。個々のアートマンは、普遍的な自己(ブラーマン)と一体である、というのである。

イスラム教においては、人間はアラーとの関係の中で存在する。「彼は汝を一つの魂として創造した。そして一つの魂として、彼は汝を生へとつれ戻すであろう。」⁽²⁾人間がアラーとの間に持つ関係は奉仕の関係であり、主人と下僕の関係である。人間は「アラーに服従する」⁽³⁾ように勧告されているが、各人はアラーの法律に従って生きるか、それともそれに反して生きるかの自由を持っている。かくして、「各人の魂は自らの行為の⁽⁴⁾人質」なのである。

「不滅の日」⁽⁹⁾としての最後の日に、各人の魂は自分が何をしたかを知るであろう⁽¹⁰⁾と言われる。

仏教は、いかなる永遠の魂や自我をも否定する点で注目し値する。この点において、仏教は世界の諸宗教の伝統の中でもユニークである。仏教は、特にヒンズー教のアートマンの存在を否定する。「無我」(アナッタ)という観念は、良く知られていると同時に、我々西洋人にとっては理解しにくい観念である。興味深いことに、ある日本仏教の学者は、次のように書いている。

仏教は、どちらの自我(またはいかなる意味における自我)を人間性から取り除くことを望むかと尋ねるかも知れない。というのは、仏教のいう無我という言葉は、仏教徒であるかいなかを問わず、いかなる人をも、仏教の中に存在するある種の自我の圧倒的に実在的な生命力に対して、盲目にすべきものではないからである。……ますます「無我となった」もしくは「自我を無くした」自己は、西洋人が自立的、統合された、解放された、自発的な、拡大された、もしくはは償われた自己という用語で示そうとしてきたものに、ますます似たような行動をする⁽¹¹⁾のみならず、特に大乘仏教においては、瞑想の中で、もしくは悟りを得る時に実現される真の性質、すなわち仏性について語られている。著名な禅の学者である阿部正雄も、また自己の「真なる自我」への「自覚」について述べている⁽¹²⁾。

キリスト教の「自己」もしくは魂の観念は、よく知られている。ジョン・ヒック(John Hick)は認められた、イギリスの神学者かつ宗教哲学者であるが、この観念を次のようにうまく特徴づけている。

キリスト教の魂の概念の中には、疑いもなく、賞罰を受けたり、信仰によって神を知るようになるか、または知るようにならなかつたり、さらに天国の至福の生活を享受することになるか、または永遠に天国の喪失という苦痛を受けることになるところのこの意識ある自我が含まれている⁽¹³⁾。

道教においては、自我の実在性は、人間が「自己」についての思いをほとんど持たない⁽¹⁴⁾ように勧められていることから明らかに認識されているし、儒教においても、人間の（道徳的な）任務は道徳的な資質を養うことであるという点で、自我が考慮されている。「天が私の中にある力を作つたのである。」⁽¹⁵⁾「このように、修練することは容易なことではない。私は、道徳的な力を作り上げたいという欲望が性的欲望と同じくらい強い人を、いまだかつて見たことがない、と師は言われた。」⁽¹⁶⁾

インドの信仰の一つであるジャイナ教は、人間がジバ（魂）とアジバ（物質）から成っているという観念を持っている。アカラニガ教典は、「自己の魂が何度も生まれ、どちらの方向であれ、あれかこれかの方向に到達するということを知っている者もいる。」⁽¹⁷⁾と述べている。さらに、ニチアナイミツチカーパタバリのの中では、「我が魂は唯一かつ永遠であって、直観と知識によって特徴づけられる。私が通過するそれ以外のすべての状態は、関連によって形成されるものであるが故に、私にとっては外面的である。」⁽¹⁸⁾日本固有の信仰である神道では、各人が「カミ」の性質を持っているという観念が良く知られている。また、アストン（W. G. Aston）は、「人間のミタマ」あるいは「魂」について語っている⁽¹⁹⁾。

統一主義（Unificationism）には「自己」の観念があるが、これについては本論文の後の方でもっと詳細に考察するので、ここでは立ち入らないことにする。

以上に述べた仏教を含むすべての教説の中には、「自己」という常識的な観念があるのであって、普通これは、「経験的」な自己⁽²⁰⁾、すなわち、われわれが考えたり、感じたり、記憶したり、その他日常の体験の中で知っている自己であると言われている。このような自己は、良かれ悪しかれ、純粹であれ不純であれ、また利己的であれ非利己的であれ、さまざまな欲望や感じや要求を持っているのを我々は経験する。

それにもかかわらず、その他にも「より高い」自己が存在するように思われるのである。これは世界の諸宗教の間でさまざまに理解されており、普通何らかの宗教的な道を歩んで我々自身を何らかの形の精神的な規律の下に置くことを通してのみ、達成したり、実現したり、悟ったりするものである。そのような規律の中に含まれるものとしては、普通より低い自己の欲望や必要を否定することがあげられる。精神的な道に沿って進歩することができるのは、部分的にはそのような否定によってである。私が本論文の中で考察しているのは、一部にはこのような意味の否定、すなわち自己否定なのである。しかし、私はそれについて一つの別の仕方と考えており、そのことについてはすぐにより明確に成るであろう。いま述べた意味での否定は、世界の宗教的伝統の間で普遍的に見いだされる。次は、否定されつつあるものは一体何であるのかについて、より注意深く考察しなければならぬ。これから、この疑問に目を向けることにする。

三 宗教的な道ないし規律に従って否定されつつあるものは何か。

世界の主要な宗教には、すべて「間違った」思いや「間違った」行動に対する強い制裁がある。貪欲、色欲、不品行、嘘つき、盗み、怠惰などはそうした警告を受けているもののほんのわずかな例である。これらは、人間をこの世の者に隷属させつつけるが故に、厳しく非難されるのである。世界のさまざまな教典や宗教的古典は、すべて靈的に負けるような行動に対して警告している。そうしたものの代表的な文章をいくつか見てみよう。

仏教のダンマパーダは、「悪なることをせず、善なることをせよ。心を清く保て」と勧める。さらに「もし、人が何か間違ったことをするならば、それを再びさせないようにせよ。罪の中に喜びを見いださせてはならない。誤

った行いを積み重ねることは苦痛である。」⁽²⁰⁾と言っている。おそらく最も有名な句節として、ダンマパーダは次のように述べている。

今日の我々は、昨日の我が思いから来ており、我が現在の思いは、明日の我が人生を築く。我が人生は我が心が作る。もし人が、不純な心をもって語ったり行いをするならば、ちょうど荷車の車輪がその荷車を引く畜生の後からついて行くのと同じように、苦しみがその人の後からついて行くのである。⁽²¹⁾

シャンカラは、その「識別力の最上の宝石」(CREST JEWEL OF DISCRIMINATION)の中で、「感覚の対象物に思いをめぐらすことを止めよ。それこそすべての悪の根である。」⁽²²⁾と述べており、ウパニシャッドの中には、「快楽に従う者は目的に到達しない。」⁽²³⁾という言葉がある。仏教の sutta・ニパータ (SUTTA-NIPATA) は、「感覺的欲望への執着を捨て去ること」⁽²⁴⁾が生まれ変わりの繰り返しを断ち切る、と述べている。それはまた、「この世において過度に利己的な者……これは悪臭である。」⁽²⁵⁾とも言っている。最後に、「物事を受取るに際して、渴望、執着、貪欲がある。それをなくさなければならぬ。」⁽²⁶⁾と言っている。

儒教の論語では、「思いの中に悪がないようにせよ。」⁽²⁷⁾と言っている。さらに、ある特定の個人のことを指して、「彼は自己の欲望のなすがままになっている。どうして堅固であると呼べようか」といい、さらにもっとはっきりと、「不品行な楽しみから得られる喜びは有害である。」⁽²⁸⁾と言っている。

バガバッド・ギータは、「貪欲と怒りは情欲から生まれ、大いなる悪に対して破壊の要諦であり、これが魂の敵である。」⁽²⁹⁾と主張する。

コーランでは、「肉欲を抑制する信仰者は楽園を受け継ぐ者」⁽³¹⁾である、と言っている。また、「罪を犯してこの現在の人生を選んだ者たちは、自己を地獄の中に見いだすであろう。しかし、自らの魂の欲望を押えた者たちは、

楽園の中に住ませよう。」⁽³²⁾そして、「自己の貪欲から身を守る者たちは必ず栄えるであろう。」⁽³³⁾とも言っている。道徳経 (TAO TE CHING) は、「できるだけ欲望を少なく」⁽³⁴⁾持つようにせよ、と説き、「賢人は過ぎたることを避ける」⁽³⁵⁾言っている。「多すぎる欲望を持つことほど大きな罪はない」⁽³⁶⁾し、「貪欲であることほど不運なことはない」⁽³⁷⁾と明白に警告している。

世界の諸宗教は明らかに、多くの感覚的な快楽を至るところで得ることのできるこの世の事物にあまりに執着しすぎるようになることを奨励していない。「信じる者たちに誘惑から目をそむけて肉欲を押えるように命ぜよ」⁽³⁸⁾と教えている。次のような言葉の知恵深さは言うまでもなく、その持つ意味を考えてみられたい。

もしある人が戦場で千回勝ち、さらに千回勝つとし、もう一人の人は、自己を征服するとしたら、後者の勝利の方がより大なる勝利であろう。なぜなら、勝利の中でも最大の勝利は自己に対する勝利であるからだ。⁽³⁹⁾

この言葉は、われわれにもう一つの意味深い言葉を想起させる。それは、「人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、何の得になろうか」⁽⁴⁰⁾という言葉である。他方、世界の諸宗教の説くそれぞれ異なった道は、すべて精神的な健康や進歩にとって助けとなることが歴史的に示されてきた考えや行動を奨励している。すなわち、奨励されているものは、抑制するようにと警告されているそうしたすべてのものとまさに正反対のものである。道徳、純潔、真実、思いやりなどは熱心に勧められている。そうした内容の言葉は、世界の諸宗教の教典の中にくさんある。それらはあまりによく知られているので、ここに引用する必要はないであろう。

なぜ、「この世界」とその感覚的快楽が、靈の旅路にとってそのようなのであるのかについて問わなければならぬ。これについてはもう少し後で述べるつもりであるが、すべていくつかの引用を用いて明確に示そうとしたように、諸宗教の伝統において奨励されていることと抑制するように警告されていることが著しく二分さ

れている点についてまず考察してみたい。

上述したすべての行動や態度は、利己心と非利己心という観点から考えることができるように思われる。これらは互いに正反対である。もし私が利己的な人間であれば、私は通常、他人を犠牲にしても自分自身の欲望を満足させたいが故に、道義に反するような行動をするかも知れない。また何事でも、それが真実であろうとなかろうと、自分の望む方向、すなわち自分だけにとって良いような方向に行ってほしいと望むが故に、うそをつくかも知れない。もし真実を語ればある場合には自分が傷つくか不幸になるかも知れないので、そういうことにならざるを望まないからである。また、ある物を所有したいが故に、たとえそれが誰か他人の物であったとしても、盗むかも知れない。このような行動は、すべて私の利己心、すなわち他人のことを考えないで、世界はすべて完全に自分を中心に行っていると見る私の態度の表われである。大部分の人々は、さまざま程度の利己心を、それもいろいろ異なった時に異なった程度に表わすものなのである。他方、もし私が利己的でない人間であるならば、私は道徳的に行動する。それは、私が他の人々との関係を大切に思うからであるし、そのような関係を大切に思うのは、私が単に自分自身のみでなく、他の人々をも大切に考えるからである。同じように、私は正直でありうそを言わない。それは私が、自分自身の個人的な立場がうまくいくことだけを大切に思うのではなく、他人を含む全体の幸福を真に大切に考えるからである。また、私が他人の物を盗まないのは、私は他の人々の気持を大切に思うからである。このような行動は、すべて非利己心、すなわち世界を全体として見、その中に人々を自分自身の小さな個人的な世界よりもっと重要であるとする態度の表われである。特に、すでに強調したように、私は世界を自分自身以外に他の人々も含まれているものとして見るのである。

「自己否定」について述べるに際して、我々が否定しようとするものは何であるかについて、もう少し明らかに

しておきたい。まず第一に、前に引用した諸教典を考慮に入れると、人間の行動は、明確な二つの段階に区別することができると考えられる。まず、心の中に、ある考え、欲望、衝動などが浮かんで来る。第二に、このような考え、欲望、衝動を實現もしくは達成するために、それに基づいて行動する。それ故、我々が「自己」について語る時は、考えや欲望、衝動などの所在地としての心そのものに、注意の焦点を正しく合せることができると思う。さらに、心について語る時に、先に述べたように、我々人間には、「より高い」心ないし自己と、「より低い」心ないし自己の二つがあるという観点から考えることを提案する。もちろん両者とも人間の心の側面であるが、そのような空間的なイメージは、宗教的文章の中でしばしば用いられている。確かにそのようなイメージは比喩的な意味で用いられているものと考えるべきである。さもないければ、一つの心がもう一つの心の上にあるというようなばかげたイメージに陥ってしまう。比喩的に、「より高い」心とは、その性向、願望、衝動などにおいてより神的なことであると考えることができる。同じように、「より低い」心とは、よりこの世的な心で、普通、体や肉の性向と関連しているような心であると考えることができる。世界の偉大な諸宗教の伝統は、より高い心に従って行動し、より低い心に従ってなされるような行動を否定するよう我々に奨励している点において一致している。従って、否定されるべき「自己」とは、この「より低い」心に満たされている自己のことなのである。

宗教生活は、より高い自己ないし心に従う生活の方が、より忍耐がよくより意味があり、また長期的には、靈的により高めてくれるものであることを実質的に証明してきた。それと同時に、より低い自己ないし心に従う生活は、自己破壊的であり、人間を地獄へと導くものであることを示してきた。

ところで、現実にはより低い心とより高い心を分離することはできない。宗教的伝統が示すように、我々は、自分の心が道徳的葛藤の中にとらわれた心のように一つであるのを体験する。深層心理学は、心の中にダイナミッ

クな精神活動が生じていることを示している。これらは普通は部分的に意識されないものであると考えられており、それはある程度は正しい。しかし、深層心理学は、心を科学のレベルにおいて取り扱っており、宗教的な観点は何ら考慮しないということにおいて、欠けるところがある。例えば、より低い心のもつ諸要素をいかなる意味においても「異質なる」ものとは考えない。心の中にあるものは、精神異常や利己心を含めて、すべてが人間の心の存在論の完全に正常な側面であると我々に信じさせようとする。心理学は、宗教や神学の考え方をまじめに受け取ろうとしない。この点において明らかに限界がある。心理学は、キリスト教の中に見られる神やサタンのような神学的な概念や、その他の宗教にある機能的に同じような概念をほとんど信じない。そのような概念を認めるならば、より低い心の異質の性質に対して、必要な哲学的基礎づけを与え、より低い自己を否定したいと願う理由を説明することができよう。善と悪、および特にそれらの背後の代理的存在に関する諸原理を、真剣に取り上げ始めなければならぬと、私は提言する。「統一思想」においては、神とサタンの存在を肯定する。しかし、それよりもっと重要なこととして、私は人間の心が現在そうであるように、重大な変調をきたしているということを論じたのである。これは、我々が世界の諸宗教の道徳的訓戒を注意深く研究するときに到達する結論である。この変調状態にあるという観念については、まもなく明確になるであろう。

「自己否定」というとき、私が語っているのは、先に述べたように、利己的で不純な欲望や性向、傾向などを持つより低い心のことである。世界の諸宗教はこの点において同意するであろうと思う。かくして論語は、「心を道に適う」⁽⁴⁾ようにすることを勧めるのである。大部分の人々が宗教の道に全面的に従っているわけではないことを、諸宗教は認めている。我々は皆が皆、生れながらの修道僧ではない。「大部分の人々はこの世の人生の外面的な見せびらかしに気を使う。」⁽⁵⁾求める者は少なく、見いだす者はさらに少ない。「私を知る者はほとんどいない。それ

故に、私には高い価値がある⁽⁴²⁾」のである。「マタイによる福音書」二十二章十四節は、「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない。」と言っている。これが意味することは、大部分の人々においては、人生における指針を与えられているという意味で、より低い自己(心)の方が支配的であるということである。大部分の人々の生活は、より低い心の欲望や衝動を中心としており、より高い心から来る衝動は実際上ほとんどなく、生活の中でほとんど影響力を持っていない。ある人々においては、より高い自己が開かれるようになり始めている人もおり、また、非常にわずかな人々(イエス、仏陀など)においては、高い自己が生活における指針を提供することができる程度に、一定の支配力を発展させている。そうした人々の生活は、より高い心の欲望や衝動を中心としている。「大きな徳を持った人は、あらゆる動きにおいて、道のみに従う。」⁽⁴³⁾大部分の宗教者の場合、「より高い」心と「より低い」心との間の闘いを経験する。事実、宗教的な道(「より高い」心)を歩もうと決意すればするほど、「より低い」心からの影響力にますます悩まされるようになり、それに対して闘わなければならなくなるように思われる。

そこで、善をしようと欲している私に、悪が入り込んでいるという法則があるのを見る。すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいますが、私の肢体には別の律法があって、私の心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。私は、なんというみじめな人間なのだろう。⁽⁴⁴⁾

かくして、靈的な規律と自己主管が必要となる。「勝利の中でも最大のものは、自分に対する勝利である。」⁽⁴⁵⁾「シヤンカラは、「克己とは、目、耳、その他の感覚の快楽をすべて放棄することである。」⁽⁴⁶⁾と言っている。簡単に言えば、「自分に勝つ者こそ強い。」ということなのである。なぜ、このような種類の人々(イエス、仏陀など)と

残りの大部分の人々との間には、そのような違いがあるのであろうか。イエスや仏陀のような人々はより高い自己が支配的であり、大部分の人々（宗教の道を歩まない人々）はより低い自己が支配的であるのはなぜであろうか。宗教の道を歩む者が宗教生活においてそのような戦いを経験するのはなぜであろうか。それは、自己の否定ということと関係がある。より高い自己が発達するためには、自己否定が絶対に必要であり、自己否定は容易にできることではないからである。

ここで私は、空間的なイメージを変えて、「より高い」心と「より低い」心というよりも、むしろ、それらを主体と対象という観点で考えてみたい。主体と対象とは統一思想から取った用語である。本論文で論じられている論点の多くは、統一思想によって明確にすることができると私は信じている。どちらの心であれ、主体の位置で機能している心が、我々の生活を支配する心であるということになる。先に述べたように、大部分の人々にとっては、それはより低い心の方である。私がより低い心と呼んできた心が主体として機能し、より高い心はその対象となっている。かくして、より低い心の考えなり欲望や衝動が、大部分の人々の生活を支配してきたのである。そのような生活は、利己主義と呼ばれるものによって特徴づけられる。イエスや仏陀においては、私が「より高い」心と呼んできたものが主体で、より低い心が対象として機能した。これが正しい関係である。このようにして、より高い心の考えや欲望や衝動が、こうした宗教の教祖たちの生活を支配したのであった。そのような人の人生は、他人に対する思いやりや非利己心、要するに愛によって特徴づけられる。宗教の道を歩む人にとって、これらの心が主体の（支配的）位置を取ろうとして、熾烈な戦いがある。より正確に言えば、どちらの心であれ、その心の衝動や欲望に従うことを毎日選択する方の心を、我々は主体の位置に置いているわけである。それ故、宗教生活をするには自己否定が要求されるのである。

私が、より高い心および主体と呼んできたものを、統一思想は「生心」と呼び、私がより低い心および対象と呼んできたものを、統一思想は「肉心」と呼ぶ。これら二つの心の間の正しい秩序（又は関係）は、すでに述べたように、生心が主体、肉心が対象として働くことである。二つの心のどちらもふさわしい位置と機能を持つておくことに留意すべきである。本来の正しい秩序が維持される時、我々の生活は調和とバランスがとれたものとなる。しかしこのような正しい秩序と機能が崩れると、問題が生じてくる。生心の主体としての機能を確かなものとするために、自己否定が必要である。

さらに、おそらくより重要なこととして、自己否定は個人的な人間関係の質にも影響を与えるということがある。ここで我々は、「心情の清さ」という概念を考察しなければならない。清い心情は、生心が主体として正しく機能しているか否か、また我々の生活が精神的にバランスがとれているか否かについての最も重要な基準である。

四 心情の清さの概念

統一思想によれば、生心と肉心をして、互いにあるべき正しい位置を維持できるように機能するのが心情である。創造本然の人間は、生心と肉心の正しい関係を維持する能力を持っている。そのような人間の心情は、成長して神の心情を中心としてそれと一体化するようになっていく。生心と肉心の授受作用は、心情を中心としているが故に調和し、完全なものとなっている。⁽⁴⁸⁾

このようなわけで、心情の概念をより注意深く見てみなければならない。それは統一思想において最も重要な概念の一つである。統一思想は、人間が原存在（神）の反映として存在すると主張する。原存在の最も根本的な

点は心情であるので、心情が人間の本性の核心である。人間を真の人間たらしめるものは心情である。心情は愛の出発点である。心情なくして愛は現われることができない。そして愛は生命の源泉である。すなわち、人間を生かすものは愛である。物質的にいかに豊かであっても、愛なくしては人生は失われ、個人、家庭、社会はバラバラになってしまう。愛こそが生命の源泉であり、人間をあるべき姿にするのである。⁽⁴⁸⁾

しかし、心情は静止した存在論的実在ではない。それはダイナミックで変化する。特に、その性質、すなわち、その清さに関してそうである。心情は「愛を通して喜びを求めようとする情的衝動」と定義することができる。⁽⁵⁰⁾ 愛は心情より生じる。我々は愛には異なったレベル、性質、種類があることを知っている。利己的な愛、利他的な愛、無私の愛などがある。それにもかかわらず、「真の愛は自分を喜ばせる前にまず他人を喜ばせる」⁽⁵¹⁾とか、「母親が自分の生命をかけて子供を守ろうとするように、すべての存在に對する無限の愛を養わせよ。」とか、「無限の愛という考えを全世界に浸透させよ。」⁽⁵²⁾という仏教の知恵についてよく考えてみよう。人間は、自分を愛することによって、真に幸福になることはできない。人生はこのことを示している。しかし、「他者」に愛を与えることによって、最も根本的な種類の喜びを受けることができる。すべての聖人たちは、このような精神的な法則、人生の法則を体験し教えてきた。清い心情は他人に向けられる。清さの心情によって、生心と肉心の間の正しい関係が維持される。「他者」を愛しているが故に、我々は、自分自身の個人的欲望よりも、「他者」に對して、より高い優先順位を置くのである。「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。」⁽⁵³⁾とイエスが言った時、まさにそのような概念を表現したのであった。

今、指摘したように、心情の清さは人の心情の質を示す。心情は人間の本性の一部であるが故に、心情は万人に与えられている。しかし、単に心情を備えているということだけでは、正しい基準とはならない。なぜなら、人

間は自己の心情を成長させ、養い、開発する必要があるのである。定義上は心情を備えていても、利己的な人々は多くいる。そのような人々の心情は、非常に不純であると言ってよいであろう。それ故、心情の清さとは、我々をして自分の心を正しいバランスに保つことを可能にさせてくれるものということになる。「心情が完成してのみ、生心と肉心との間の本然の授受作用も完全に安定したものと⁽⁵⁴⁾なる」のである。この安定という意味は、価値（真、善、美、愛）を指向する生心が主体となり、生物的存在（衣食住など）を指向する肉心が対象として機能すること、すなわち、肉心が生心によってコントロールされる位置にあることを意味する。明らかに、心情の清さということは、それに向かって努力する価値のある目標である。「不純な心と呼ばれるあの恐ろしい虎が、感覚的対象の森の中をうろついている⁽⁵⁵⁾」が、「心の清い人は最高のアートマンを実現する⁽⁵⁶⁾」イエスは、「心の清い人たちは幸いである、彼らは神を見るであろう⁽⁵⁷⁾」と言われた。心の清い人たちは、他人に対する誠実な真の愛を持ち、愛するという体験の中で、神ないし最高のアートマンを体験（「見る」）することができるのである。心情の清さと関連するのは、目的の明確さと知情意のバランスであろう。

上に述べたような心は、「自己」と「他者」にとってふさわしい価値は何かということに関して、多くの意味を持つている。「自己」のための価値としては、すべての聖人たちの生活の中で例証されたように、忍耐、我慢、正直、誠実などの個人的な諸価値を意味するであろう。人が清い心情を持たない度合にに応じて、これらの価値はその人の生活が指向するものの中で、より中心的でなくなるであろう。「他者」が意味するものは極めて意義深いもので、もっと詳細に考察しなければならない。

五 「他者」の意味、および人はいかにして「他者」を真に益するか。

統一思想には、「連体」という概念がある⁵⁸。根本的にこれが意味することは、万物が相互に授受関係を通して連結しているということだけでなく、各個人は他者との関係を持たずに存続することはできないということである。我々は絶えず周囲の人々と関係している。もし、これが、実際にそうであるとすれば、こうした諸関係の質が重要な問題となる。

ここに心理操作という潜在的な危険性が存在する。我々はたとえ表面的には（自分自身に対してさえ）非利己的であるように見えるとしても、他の人々を「用いる」ことがしばしばある。エドワード・コンゼ (Edward Conze) が指摘したように、他人を害したり、おこらせたりせずに、良いことをしてやるためには、非常に高度の高潔さが必要である。心の清い者だけが、他人にとって真に有益なものは何かを決定するのに必要なビジョンを持つことができ、そうした者だけが、動機の純粹さを持っているのである。

かくして、我々は、「他者」とはほんとうに何を意味し、さらにもっと重要なこととして、人はいかに他者を益するかを考察しなければならない。

統一思想は、連体に関連して、二重目的のことを述べている。二重目的とは、個体目的と全体目的のことである。肉心は個体目的と自己の生存に関わり、生心は全体目的に関わっている。もし、生心が主体、すなわち制御する位置にあれば、我々の生活は、これら二つの目的の間の健全なバランスを表わす。なぜならば、それは全体目的を強調し、全体目的は個体目的を保証するからである。もし肉心が主体であれば、我々の生活は不健全なバランスを示す。なぜなら、生活の方向性において、自己の肉体的欲望を中心に置く傾向となるからである。これ

は他人との関係において非常に破壊的となり得る。かくして、「自己否定」とは、私が本論文において用いてきた宗教的意味においては、自分自身の個人的な欲望を否定することを意味する。それは人生を困難なものにするためではなく、ともすれば「隠され」がちな他の人々への思いやりにより力点を持たせるためである。これはいかなる場合においても、関心を持つべき正しい順序（優先順位）である。このような自己否定が必要であるのは、無秩序な人生において、人間に共通する傾向は、多かれ少なかれ、しばしば他の人々を犠牲にして、自己の個人的な欲望に焦点を合わせるものであったからである。

それ故、根本的には、自己否定の真の意味は、一種の禁欲主義ではなく愛なのである。それは他者を愛し奉仕する生活を意味する。他の人々のために生きることによって、我々は愛する雰囲気を創造するので、これが個人間の関係を反映したものとするのである。このことは諸宗教の統一に役立つものとなることができる。全体は個体を保証するものであるから。全体目的に力点を置いて他人のために生きることが、自己の個人的な成長を減ずることにはならないことを、今一度強調しなければならぬ。全体に奉仕することによって、今度は全体が個体に奉仕し、個体を保護し、成長と発展と繁栄と健康と統一を与えてくれるのである。

六 結論

結論として、本論文で論じた点のいくつかをまとめて、その意味について述べてみたい。私はまず、あらゆる主要な宗教は、表現の仕方はさまざまにせよ、すべて「自己」について語っているということから始めた。「より高い」「自己と」「より低い」「自己を区別し、その両者の特徴のいくつかを説明した。それから、一般的な「利己主

義」と「非利己主義」の特徴に従ってこれらを分類した。そして、「自己の否定」とは、低い心に関連した自己を否定することであって、これはすべての伝統において見いだすことのできる概念であるという中間的な結論を引き出した。より高い心とより低い心という用語は、統一思想の用語では、(より高い心に近い)「生心」、および(より低い心に近い)「肉心」と表現することができることを指摘した。

さらに、これらは主体と対象として理解することができると述べた。大部分の人々の心が「秩序を失って」いる以上、このことは意義深い。すなわち、正しい秩序とは、生心が肉心に対して主体となり、肉心を統制し導くようになり、肉心は対象として生心の導きを受けようになるべきである。生心は価値に力点をおき、肉心は生物的な要求に関わっているので、両者が主体と対象の関係にあれば、バランスのとれた健全な生活となる。そのような生活においては生物的な必要もすべて十分に満たされる。しかし、もっと重要なことに、そのような生活は、諸関係において愛を実現することを中心とした生活となる。かくして正しい秩序をもって、人は愛と価値の意味ある生活をするのである。それが混乱すると、生活は自己に焦点を合せたものとなりやすい。それ故、私はさらに、自己否定とは肉心の主体性を否定することであると定義したのである。すなわち、生心の主体性が現われるようにするために、肉心の主体性を否定することである。このようになる時、人の生活は非利己主義に特徴づけられたものとなる。

生心と肉心との間の正しい関係を維持するものは、心情、特に清い心情である。人間の心は本心であると考えることができる。この心は生活の方法として、他者への愛を強調する。それ故、「自己」の否定という概念は、単なる否定という意味ではなく、他者のために奉仕生活をするという点で、肯定的に定義するのがもっと完全となる。他者のために生きることによって、我々はすべての人が恩恵を受けることのできる暖かい愛の雰囲気を創造

するのである。

必ずしもすべての場合にそれほど明確に解かれているとは限らないが、他者のために生きるというこの考え方には、すべての宗教が触れているという事実がある。例えば、論語の中では、「他人のために行動するに際して、私は常に彼らの利益に対して忠実であったか」と問われているし、道徳経では、「賢人は自分のことを最後に置く」と言っている。また、「自己についてはほとんど考えない」よう奨励し、「賢人は自己のことは構わない。人々を自己のこととして受け取る」と主張している。イエスは、「敵を愛し、迫害する者のために祈れ。」と言われた。また、「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。」（ヨハネによる福音書）十五／十三」という有名な言葉を述べている。また仏教には「では菩薩のあわれみとは何か。それは他人を幸せにしようとする無私と願いである。」とある。

他者のために生きるという考え方は、文鮮明師 (Rev. Sun Myung Moon) の思想の本質である。文師は諸宗教の統一を確信する。師にとっては、それは単に希望的な願いとか信念ではなく、実際のな心情でもある。師は一九八五年アメリカのニュージャーシーで世界宗教議会 (The Assembly Of World's Religions) を主催し、創始者として演説していることから分かるように、その生活において、他者のために生きるという原則を現実のものとしておられるのである。それはまた、師の創設した多くのプロジェクトのうち一つの組織である世界宗教協議会 (The Council for The World's Religions) がスポンサーとなって開催された、数多くの会議の中でも見ることができ。文師は次のように述べておられる。

私はイスラム教の統一を助けるために働きたいと思えます。同じように、私は仏教会の統一を支持します。皆様は、他の諸宗教の統一を支持する宗教指導者のことを耳にしたことがありますか。

他者のために生きるというこの原則が「自己否定」の真の意味であることを、私は論じてきた。このように、自己否定という概念を、よく禁欲的な意味で用いる場合のような否定的な内容と結びつけるよりも、むしろ他者のために生きるという原則を意味する、肯定的で積極的な意味で用いることを私は提案する。そうすることによって、自己否定は、普遍的な適用性を持った宗教原理となり、諸宗教の統一に向かって我々を導くのに役立つことができると思ふのである。